

NAGANO-KEN CLUB

<http://www4.ocn.ne.jp/~jia-naga/>

jia-naga@jeans.ocn.ne.jp

JIA 長野県クラブ



Vol.75

2007

09.10

「JIAの登録建築家」

JIA長野県クラブ職能委員長 片倉 隆幸

2007年国交省の法改正は、構造一級建築士、設備一級建築士という資格を認め、講習の義務化、報酬基準の見直しが始まった。JIAが望んだ「統括建築士」は実現しなかった。だからこそ倫理性と技術力を備えた設計を統括する「登録建築家」の役割はJIAが提示し続けなくてはならない。僕自身は近い将来の「建築家資格法」への夢を見ている。

JIA仙田会長は登録建築家は日々研鑽し、社会的な評価を受けなければならない。その理由の3つを述べている。

- ①クライアントの活動を十分に生かす空間創造を実現しているか。
- ②建築作品は社会的な存在であり、美しく、安全で、環境価値を上げているか。
- ③建築家として自らの設計力が十分なものであるか。

このような評価を求めて、登録建築家は建築作品と建築家としての言説を通して、社会に常に「建築家としての自分」を発信していかなければならないと考える。と述べている。

最近騒がれている、建築家紹介システム、ホスト工務店とか建築家への紹介をビジネスとする会社が多くあり、その中でもそれぞれ登録建築家という名称が使われています。消費者にとって、同じ名称はまことにわかりにくいのです。

JIAの登録建築家の目的は建築に関わる消費者保護です。この目的を実現するために「資格の付与」と「情報の公開」を行います。「資格の付与」とは建築の設計監理の仕事を責

任もって行うことができる「芸術性および技術能力と職能倫理」を備えた人物に「登録建築家」の資格を与えることです。

住宅部会の森岡さんが、建築家紹介システムは、危機的な状況に追い込まれている建築家とノ一天気な建築家の両方を対象にしたビジネスと述べています。建築家はどんなに危機的状況に追い込まれても自由、独立性、品格が大事なことです。このシステムがこれを保障しないことは明らかなことです。

僕は、住まいの設計に没頭している。誰しもそうであると思うが、深い人間愛に基づく優しさをもって設計していくとしている。丁寧にクライアントと確認しあいながらの作業の日々である。公共建築の設計も僕は基本的には同じではないのだろうかと思います。

設計の作業はクライアントの人生観を問い合わせ、点検し、確認することである。建築家はその作業を助ける存在なのだ。

住宅に限らず、公共建築の設計者選定において設計入札なんていう暴力的な言葉で設計者を決めていくことが無くなることへ…

市民と丁寧に話し合える、コミュニケーション能力のある建築家を選定する方法を提言し続けなくてはならないと思う。



「信州の建築家とつくる家 Vol.4」編集会議(7/21)



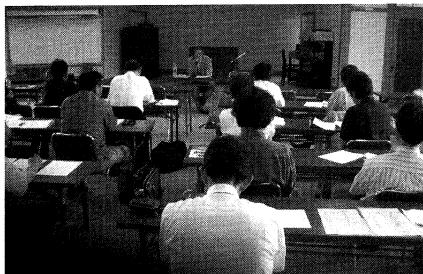
2007年度納涼会(7/21)

2007年7月21日(土)、松本市の崖の湯温泉「茜宿」において恒例の合同事業が行われました。午前に①「信州の建築家とつくる家 Vol.4」編集会議、②幹事会。午後は③講演会、④会員作品発表会、⑤技術交流会、そして最後は⑥納涼会で深夜まで盛り上りました。

講演会(河野進氏、前副会長)に参加して

山田 健一郎

今回の講演会は、JIA本部の委員として、建築士制度・公益法人化への定款作成等に熱心に取り組まれている河野進氏の「構造偽装問題とJIAの今後」についての講演でした。このテーマに関しては、JIA長野県クラブでも一昨年来、「本音を語る会」等で何度も取り上げていますが、今回の講演は、それらの問題、「構造偽装問題」「改定建築士法・改定建築基準法」「登録建築家制度」「公益法人化へ向けたJIA定款」などについて、JIA本部組織の中核の考え方や動きを解説して下さいました。



講演会

会員作品発表会(川上恵一氏)に参加して

広瀬 毅

「焼杉ハウス」は長野県(茅野市)出身である藤森氏が長野市につくる最初の建物。そこに川上さんが共同設計者として参加したちょっと珍しい形の発表でした。

設計の過程には沢山のスケッチのやりとりがあったようで、その一部のコピーも展示されました。それらの設計の過程の紹介では、「ありえない〜」感じで飛び出た茶室の構造についての説明や、隙間を空けて並べられた焼杉の間隔をどうするか云々、というやり取りももちろん興味深かったのですが、私が気になったのは最初から最後まで一貫してある建物中央のトンネル状の空間でした。

この場所は一番最初のスケッチから、少しずつ形態を変えながら執拗に検討されますが、出来上がった建物には縄文時代の洞窟(いや、もちろん見たことはないですが)のようなイメージが実現されています。藤森氏の建築は、メルヘンと土着の危ういバランスを保つ特異な形態と、プリミティブな手仕事をそのまま表現する仕上に眼を惹かれますが、その内部空間も質感を肌で感じるような、独特の胎内感覚とでも言うべきものがあ

多岐にわたる話の中で、印象に残ったのは、話の中に何度も登場した「建築家」という単語と、最後に語られた「何故、JIAの会員になるか?」という問いでした。

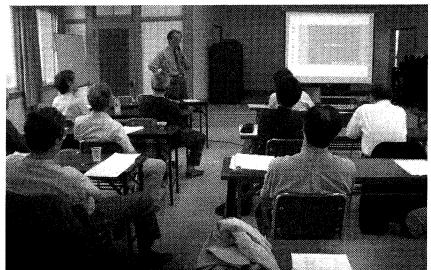
JIAでさえも、「建築家」という言葉の定義はあいまいで、専兼問題・UIAとバランスした専門教育など、一枚岩になりえない議論は終わることが無いでしょう。社会的な、あるいはJIAの「建築家」という言葉の定義がどうであれ、自分自身で「建築家とは」と常に自問自答しつつ、活動していくしかないのだと思います。私は「自分自身、そして社会に対して建築家である事の宣言」と考えてJIAの会員になりました。河野氏の最後の問いは、改めて「建築家である事」を考えさせて下さいました。



るような気がします。

そしてもうひとつ、途中で説明のあった焼杉の製作風景に代表されるように、建てるという行為そのものを楽しみつつ格闘しながら作り上げていく姿勢。新しいものを作りあげるにはそんな態度が不可欠なのでしょう。ついつい机の上の設計ばかりに費やしてしまう時間を少し反省しました。

川上さんのお話はやはり面白いですね。藤森氏の話も何度かお聞きしたことがあります、こちらも穏やかな中にユーモアのあるすばらしい語り口です。一方の川上さんのたたみかける様な喋り口、今度は是非お二人でかけあい・・・いや、対談をしていただきたいですね。きっと楽しく有意義なお話になること請け合いです。

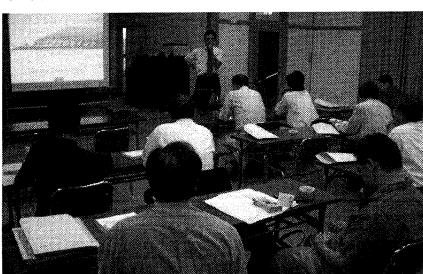


会員作品発表会

技術交流会(田島ルーフィング)に参加して

勝山 敏雄

屋根防水の改修にあたって、防水仕様の選択に対してどのような手順で選定し、決定していくかが非常に役に立った。撤去工法、かぶせ工法・再生工法があり、撤去工法は既存の防水層を撤去して新規に施工する方法で、防水に様々な工法を選択できるがコストや工期、作業性、騒音等を考慮すると、既存の防水層を下地として新規防水層を施工するかぶせ(再生)工法によ



技術交流会

る改修のほうが、既存と新規の防水の相性を検討する必要はあるが、より良い事が理解できた。屋根改修の設計をする場合、設計者はフロー

によって選定する流れや、工法の特徴をよく理解しておくことが重要であるが、防水工事の状況を的確に判断してくれる専門の人間に依頼できること、依頼先を知っていることが重要であると感じた。既存防水の種別、劣化状況、屋根形状・納まり形状や改修後の用途、現場特有の条件・周辺環境等を把握・検討し、工法を絞り込み決定していくためには、やはり技術的な実績や経験、専門的な知識が豊富な人の現場状況の確認が大切ではないかと思った。また、新築物件の設計にあたって、建物を長持ちさせるためにもいざれ改修が必要になってくることを念頭において、再生が困難な工法もあるので、改修工事の工法を考慮に入れて慎重に防水の仕様を決定していくことが重要であると感じた。



平成19年度第1回街歩きは観光シーズンに入ったばかりの蓼科でした。梅雨時でしたが好天に恵まれ高原でも熱いくらいの一日でした。午前中は蓼科周辺に散在する別荘を自由見学、午後はトヨタ記念館(旧渡辺千秋邸)とダイキン・オー・ド・シェル蓼科の見学会でした。

今回は地元ということで私が企画させていただきました。別荘見学は地図を見ながら建築家の手がけた仕事見て回るのですが短時間で見学するのには17軒は多かも知れませんお目当ての別荘に辿り着けたでしょうか。時間のあるときにゆっくりと見学してください。



トヨタ記念館(旧渡辺千秋邸)



ダイキン・オー・ド・シェル蓼科

トヨタ記念館は元々は岡谷出身の宮内大臣渡辺千秋が高輪にて建てたものその後土地がトヨタ自動車に渡ったが建物は壊すにはしのびないということでトヨタの所有していた蓼科の地に里帰りしたという訳です。残っている個人の邸宅としてはトップクラスだと藤森照信さんが申しておりました。一般公開していない建物なので団体の見学は久しぶりだったそうです。

最後にダイキン・オー・ド・シェル蓼科を見学しました。室伏次郎さんの設計で建築学会賞をとった建物です。広大な敷地の中にゲストハウスのいろいろな機能を分散配置して自然に溶け込ませた施設です。オー・ド・シェルとは天の水という意味だそうですがまさにそんなイメージでした。

会員9名・賛助会員3名・同行者21名・計33名に参加していただきました。

新潟中越沖地震 現地相談に参加して

■新潟中越沖地震『現地状況について』

竹花 彰男

7月16日(月)10時13分ころ、上中越沖を震源地とした大規模な地震が発生し、柏崎市では震度6強を記録したとのニュースが流れました。

私はその時間近くの公園までウォーキングの最中でまったく気が付きました。家に帰ると子供達が大騒ぎをしていました。自宅もだいぶ古い建物なので壊れるのではないかと思うほど揺れたみたいでした。佐久地方でもあまり経験のない震度4ぐらいはあったみたいです。

地震から数日後、突然県から応急危険度判定の依頼があり7月20日朝4時30分ごろ日帰りで新潟へ出発しました。途中新井のパーキングで他地区の関係者と合流し、柏崎市へ向かいました。高速道路を長野道から北陸道に入り米山あたりから道路の両側に屋根にブルーシートを張った建物が目立つようになり、路面も波打つようになり、高速道路が対面通行や1車線通行になり時速50kmぐらいの規制がかかり、高速道路もだいぶ被害があったようです。

高速を降り集合場所へ行く途中の市内は最初被害を受けている建物も見られませんでしたがポツリポツリ押しつぶされた住宅や車庫、納屋があり、大谷石で積まれた塀は結構倒れていきました。現地に着き早速二人一組で40件ぐらいの調査に向かいました。私達の担当した地区は結構新しく築15年ぐらいから今年完成したぐらいの住宅ばかりでした。

赤、黄、緑の判定用紙を持ち住宅地図を頼りに一軒一軒調査に入りました、私達の担当した地区は、建物の本体の被害状況はこれといった大きな被害はありませんでしたが、内部は大変な有様らしく玄関先に出された破損したガラスやセトモノ等が地震の凄さを物語っているように思われます、又、玄関ポーチの床部分の亀裂や駐車場の土間コンの亀裂やU字溝が押されたり、4~5m巾の水路が両側から押せれ川底が盛り上がっており、マンホールが20cmぐらい飛び出していたり、海沿いの砂地の特性なのか地盤が凄く流動化したように見られます。それに伴い人々のライフラインである電気、水道、ガス、下水道が破損し、家にいながらトイレも使えず食事の用意も出来ず風呂にも入れない日々が続き、普段空気のごとくあたりまえのことがあたりまえでなくなってしまう怖さを再認識し、廻りに頼りきった生活を少しでも自立できるよう考



え直さなければならない様思います。今回私達の担当した地区は幸いにして被害は小さい場所でしたが同じ柏崎市内でも大変な被害に遭われ避難所生活をされている方々がたくさんおられます。皆様にお見舞いを申し上げ、一日でも早い復興を願うばかりです。

■新潟県中越沖地震応急危険度判定に参加して 野口 大介

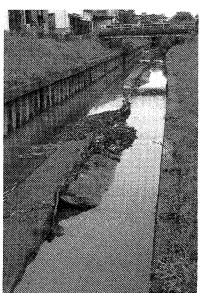
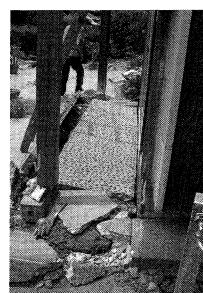
新潟県中越沖地震の応急危険度判定にボランティアとして7月21日に参加しました。

場所はJR柏崎駅近くの新橋です。市内には、屋根が落ち元の建物を想像することが出来ないほどに破壊されている建物が点在していました。

また、道路は波打っており、いたる所から砂が噴出して液状化現象が見られます。この地域は地盤が元々悪いそうです。そして盛土埋土をする場合、昔は海砂を使っていたと地元の高齢の方が話してくれました。被害を大きくした一つの要因かも知れません。今までそこに住む人達を守っていた家が、地震の為に一瞬にして凶器に変わり命を奪ってしまう。もし自分が設計をし、監理をした建築がこの様になってしまったら…

判定をした中で、昔はお店で、現在は住宅として使っている民家がありました。道路に面した間口には壁が無く、隅柱だけで架構されている典型的な町屋です。隅柱は10mm程度しか土台に載っておらず、下げ振りなど使わなくとも危険と判断できます。少しだけ余震や、強い風が吹けば外れて崩壊してしまう状態です。

屋内に人が居るようだったので声を掛けると、おばあさんがいらっしゃいました。『この家は大丈夫ですか?』と聞かれたので、『危険な状態ですから避難所へすぐに移ってください』と答えました。地震発生から、一週間近く経っているのになんという事でしょうか。これでは判定が遅すぎます。今の応急危険度判定のシステムを変えなければ二次災害は防げないのではと思います。



賛助会だより

「喜びを与える仕事」

賛助会員によるPRの場の初回を盛り上げたいということで、私の営業内容を積極的かつ簡略にお話したいと思います。全社的に多角化を進めている当社ですが、私の所属する建築部において多くの取扱商品を持ち様々なニーズに対して提案が出来る様になってきています。

昨今、環境に配慮した製品及び工法が求められることが多いわけですが、例えば自然採光と自然エネルギー利用を兼ねて「シースルー発電」にするとか、地域材を「圧密技術」でギズつきにくい床材に加工するとか、特徴があつて有効な方法を紹介することが出来ます。

また、販工一貫体制として自社で作図スタッフを持ち専属職班を持つ「既成コンクリート板」は要の部門であり、また自信を持つ

JIA長野県クラブ 賛助会員 (株)本久 岸本貴志



て営業しているところです。私自身、特殊なディテールなどもストックし提案の機会を待っていますので「この外壁どうやってるんだろう?」「こんなふうにしたい」などということがあれば是非とも声を掛けて頂きたいと思います。

世の中の価値観が変わり、生産性の無いもの、建築だけではなく文化的なものが総じて削られていく傾向がある様に感じます。一方、負けずにこだわりを持ち続け、その先にある価値に気づかせ喜びを与える仕事(会員の皆さんの仕事)に係わることを期待しつつ、今後も会の活動に積極的に参加をしてまいりたいと思っております。

「INAXライブミュージアムのご紹介」

弊社INAXの本社は愛知県の常滑にあります。本社より車で10分ほど行きますと、常滑東工場という外装タイルを生産している工場の横に「INAX ライブミュージアム」という文化施設が見えてまいります。

昨年10月にオープンをした文化施設で、
①世界のタイル博物館 ②窯のある広場・資料館 ③陶楽工房 ④ものづくり工房 ⑤土・どろんこ館
の五つの施設から成ります。
④、⑤の施設を昨年新設し、「INAX ライブミュージアム」と名付け、「発見」と「継承」をキーワードにさまざまな企画・展示、ワークショップを開催いたしております。

JIA長野県クラブ 賛助会員 (株)INAX 平林幹久



なかでもお薦めいたしますのは、土・どろんこ館での「光るどろダンゴ」づくりです。すでにご経験済みの方も見えるかもしれません、是非一度体験してみてください。

また、版築の外壁、久住有生氏が手がけたイタリア磨きの壁、常滑大壁と名付けられた塗り壁等々見ごたえのあるものばかりです。9月30日まではフランク・ロイド・ライトの展示会も開催しています。詳細は下記アドレスまで!!
土の魅力が満載のミュージアムです。

<http://www.inax.co.jp/ilm/>

「緑豊かな地球のために」

JIA長野県クラブ 賛助会員 (株)ランバーテック 丸山淳治



製造時・廃棄時のCO₂排出量も少ない断熱材で冬の寒さと夏の暑さから住む人を守り、且つ省エネになる「高断熱パッシブ自然換気の家」をNPO断熱組織で提案しています。

また地元の森の木は地元で使わなくては他県の人は使ってくれません。初期耐久設計を100年以上発揮する木材保存+寸法安定処理と定期点検+メンテナンスが出来る「ハウスガードシステム」もお勧めです。これからも信州の自然を守るために頑張っていきたいと思っています。

■出版予定

11月末 「信州の建築家とつくる家 Vol.4」

①巻頭特集

後悔しない、失敗しない

「建築家からの家づくりアドバイス」

②建築家36人の仕事



この原稿を考えてる今はまだ、猛暑・酷暑が続く盆地です。いったいいつまで続くのかこの暑さは、これも地球温暖化のせいなのか…とか思いつつ。快適さっていったい何だろう。人にとっての快適さは、もしかしたら地球環境を壊す事なのか?環境を改善してゆくためには、快適さのどれを確保して、どれを犠牲にするのか。今後JIAとして、こういう事が重要な課題になるのかも知れない。などと考えてしまいました。

広報副委員長 水谷 健治(新井建設)

皆様からの投稿をお待ちしております。誌面へのご意見もお寄せ下さい。

編集人／林 隆 発行所／JIA長野県クラブ 長野市南長野妻科426-1 長野県建築士会館内 TEL:026-232-3897 FAX:026-232-5303

発行人／西沢利一

URL <http://www4.ocn.ne.jp/~jia-naga/> E-mail jia-naga@jeans.ocn.ne.jp